

発病より終焉まで

一昨年一月末の頃、軽微な風邪を引いた。それがもとで暫く病臥の人となつた。醫師の勧めもあるので静養を續けてゐた處、幸ひ病氣も回復して家事の世話をみてくれるやうになつた。ところが、七月の中旬頃、暑さの障りか、また病床に臥する身となつた。それからどうも、もと通りの体に回復しない。夏の暑熱は益々加はりひどく体に障つたらしく、醫師も病氣の永引くを憂慮して、入院加療すべきをすゝめられた。と云つても熱もなく食欲もあり、予の思ひでは入院して加療すれば直ぐに全快すること、思つた。事實、家の内では二人の子供はあるし、家事を捨て、静養することは、女としては出来難いことのやうに思へたから、始めは一、二ヶ月を當地岩國病院の病室で過ごした。その間には弟の三つになる子供が嫁から谷川に轉び落ちて頭を大怪我して両親と共に大きな心配をしたが、入院中の

妻には体にさはることを氣づかひ、その事は殆んど全快して後に話してきかした。

入院静養の甲斐があつて漸く退院することになつた。その當時の妻の悦びは當日の日記によりて窺知することが出来る。然し尚、豫後静養の必要ありとて僅か一週間を我が家に起臥し、直に妻の里、下松に行くことになつた。それは、一昨年の十一月十七日であった。妻の郷里の家は、高層な山麓に位し北山を負ひ、南海に面し、眺望またよく、田園と海洋とを一瞬のうちに見渡すことが出来た。家には母親や姉弟などあつて、妻の回復を一日も早くと祈り、真心こめて看護せられた事は云ふ迄もない。寧ろ順調に進んだと云つてよい。殆んど熱ではなく、いつもかうして寝てゐるのが、勿体ない感じがする、早く家に歸つて、お母様に子供の心配して頂いた、御恩返しがしたいと云つてゐた。子供の世話を見せて、お母様には濟まないすまないとは常に妻が筆にも口にもいつてゐたところである。

然し母も予も今暫くの静養だ、今に元氣になつたらうんと働いて世話を

て貰いたいから、今暫くだと、只管靜養の必要を勧めた。体の靜養のみならず心の靜養も必要だと予は常にその必要な事を手紙にも書き、會ふ毎にそれを説いた。

一年有餘のこの療養中、自分の病氣を忘れんため歌を作つた。これも予のすゝめで病臥の身となつて始めたので作法も何もない、それ故、皆の目にかけられるものではないが、妻の病臥中の心境は、これによりて窺ふことが出来得るやうに思ふ。何と云つても我子の事は氣に懸つたらしい。それは無理からぬこと、子を持つ親の心は一つである。此方國よりの便りを何よりも楽しみに待つてゐたので手紙はよく書いたものだ。妻もよくまた書いた。予も病臥の彼を慰めるのはこれより他ないと思つたから、繁忙のうちにも、彼に手紙を書くことは忘れなかつた。妻の死後、予が送れる手紙は三百通近くもあり、これが丹念に箱にしまつてあるのに、自分乍ら驚いたくるだつた。妻から奇越す手紙も半分は子供の安否を問うのであつたが此方から書く予の手紙も子供の動靜が半分以上でつぶれた。予は度

々子供を連れて行つて、子供の健やかな顔を見せて、彼を喜ばした。姉の方の子供は學校の休暇中は必ず母の側で過ごした。今から思へばこの時が母にも子にも樂しかつた時であらう。

今暫くの靜養だ辛抱だと予等も思ひ、彼も思つてゐたに、それは突如、昨年十二月十一日の朝「リンコキトクスグコイ」との飛電をうけとつた。余りの意外の事に吃驚した。母は「こりや倫子さんは死んだのだ」と聲をたつて泣いた。そんなことはないと、自分はうち消したもの、心の内は淋しかつた。つい十日前の事である。弟の方を伴ひ彼の病床を見舞つたのは。それは忙しい折柄の事とて僅か二三時間しか居ることが出来なかつた。多少その時、前に來た時は瘦せてゐるやうに思へたので、もつと肥えなければと云つた。でも、其間、元氣よく話して訣れた。又亡くなる四日前にも彼は、はがきを書いて奇越してゐる。それが危篤とも死んだとも信じられない。丸々とこの頃はよく肥えて丈夫になつた。子供の顔を見て、喜んだ妻の顔がはつきりまだ残つてゐる。この電報をうけてダイエットしてをれな

い。学校へ今年から入学した百合子を学校へ呼びに云つて貰つた。お母さんが病氣と聞いて泣いて歸つたのを暫くすかしなだめた。

家内のものは、皆出てゆかねばならぬ。父の中蔭法要の日は旬日に迫つて、その準備の爲、昨日は總代集會を開いた、報恩講説教もその次行ふ事になつてゐるので、今やつと通知を門信徒に發送したばかりである。こんな時機に際會してゐるのに、この事があつたので一時は當惑した。事實夢ではないかと思ひ、荷造りをしながら机の上において電文を幾度か手にとつては讀んでみた。

正午近くに母と予と子供二人他に一人、五人連れで急遽、妻の里・下松にかけつけた。然し萬事休す！彼は既に此世のものではなかつた。何にも知らず病氣とばかり思つてきた姉の方は、様子のたゞならぬを見て始めて母の死を知り、ワットなく、弟の四つになる方は、お母さんは何處へ行つたときく、これ等みな胸をつく。人生の悲惨事これより大なるはあるまい。慈父を失ひてより丁度、一ヶ月目、涙の乾ける間もなく、またこの計に接

す。泡沫夢幻の人生の眞相を、さながら展開せしめられ、せきくる涙を禁じ得なかつた。

「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなきに、たゞ念佛のみぞ、まことにて、おはします」との聖語の今更ながら、しみじみと身に知られて、たゞ念佛するの外はなかつた。

死の余りに突然だったので、先方の驚きもなみたいていではなく、文字通りに驚愕悲歎の涙にくれてゐられた。死ぬる日の朝は、彼の永劫の首途を祝すかのやうに、冬の日には稀に見るお天氣だつた。今日はい、お天氣だから蒲團を乾して部屋を掃除してくれと、何くれと掃除の事を付添の者につげ、朝食もいつもよりよく食し、用便に立つて行つたが、歸る廊下で悪くなり、付添の者に母を呼んでくれと云つた。驚いて母は駆けつけたがもう一言も云う事は出來なかつた。死の前日、彼の母上に永いやうでも脆いものは命ですと、母に云つたときかされた。此間數分を出でないことで

愛兒の事も思ふ暇もなかつたかと思ふ。ものは思ひやうだ、重態危篤の日が永く續いて苦しめば殘る子供の事が思ひやられ体の苦しみと同時に、心の苦しみを覚え、二重の苦しみを嘗めなければならぬ。病む本人自身のみならず予等の心の苦しみも一通りでない。突如、この様な計に接した事は余りに果敢なく思ふけれど、この二重の苦しみは余り覚えなかつたと思ふて、せめてもの幸と思つてゐる。病床に就いてからは機會ある毎に御法の話に縁を結び、彼に出す手紙にはまた、それを書くことにつとめた。「我が妻子程、不便なることはなし、それを勧化せぬは淺間しきことなり。宿善なくば力なし。我身を一つ勧化せぬものがあるべきか」

このお言葉は強く予が心を射てゐた。

次に余が妻によせる手紙のうちよりその一節を載せる。

○
小生歸宅後、便りのないで悪くなつたのではないかと、只管此方、母とも心配してゐた。本當に此頃の自分は御身の体のことのみ思はれ少しで

もよいとの通知を得ばうれしく、氣の進む程である。少しは元気になつたとあるが少しではもの足りない。併し、なんばあせつても、行く處しか行かれないのだから、この上は總て心の平和を保ち、ゆめ不平の思を抱いてはならぬ。感謝のうちに病氣の恢復を進めて貰ひたい。(畧) ベストを盡して療養すること、その上の不運はお互に持つて生れた宿業なんで、人々の生活はこの宿業に催され、業因に動かされである。小生も歸つてみると、何だか晴々しい氣持ちはせず、でもこれ等はみな前世の定めで、こんな事がみな佛縁を結ぶゆかりとも考へられる。佛縁——佛恩、こんな事を思ふと自づと心が大きくなつて諦めの心も起り、何處にもいゝことはないのだ、一日でも安穩に生きることが、これ大きな恵みだと思ふ。数々のおみやげ頂きましたに、良生君には歸りには挨拶もせずすまなかた。下女も云はなからお氣の毒でなりません、こんなものを頂いてと、母に見せてゐました。

○

月日の流れは水の如く、はや三月を迎えた。春とは云ひ乍ら、寒さはまだまだ強く、毎朝、氷さへ見る。御身の病氣もまだ癒えず、春に背いて病床での日送り、同情に堪えない。小生等もいつになつたら、御身が健かな体となつて、内の世話を見てくれるであらうかと、明け暮れそれのみ母と待つてゐる。

病癒え、君の歸りをあけくれに待ちわび心如何に耐ふべき
たゞたゞ一途療養をのぞむ。



四月には歸れること、のみ待つてゐたに、それもまだ今の處では六ヶ敷い様子、然しなんばあせつても仕方ない。この上は氣を樂に持ち、時の來のを待つより外仕方ない。「散る花を追ふ勿れ、出づる月を待つべしか。」でも、四月には歸ること、思つて、今迄、精一杯それを樂み待つてゐた。寝て居れば、歸る日ばかり思はる、であらう。子供も此方では待つてゐる、そは無理からぬこと、この上は悪くならぬ事を喜ぶことだ。悪くなつたと

て、どうすることも出來ぬ、皆因縁事だ。病氣が体を亡ぼせば氣で生きる。この覺悟で進んでゆくことだ、事実氣で病氣を治した事実さへあるときく。兎角、病むと悲觀が先立つものである。それが永くなれば、自然氣も滅入り勝ちになるので、それを望むのは無理とも云へる。併し、これが鬪病精神と思つて成る丈け明るい方に心をむけ、ゆめゆめ悲觀の心を起してはならぬ。

ことに今は、手厚いお母様の看護をうけてゐる仕合せを思ひ、世には貧苦病苦に泣くあはれ不遇の人の多きなか、これ等を思ひ、せめて心の慰藉とすべし。家の事、子供のこと、病む身の上、行く先のことなどは、臥する身にとりては、それのみ繰返さる事だらう。自分等でさへ、日常の生活に追はれながら、常にそれ等を思ふのだから、愚痴だ、杞憂だと思ひ乍ら繰返へす。然し、これとはお互に心機を轉換せねばならぬ、御身は専念、療養の途上にあるもの、療養に悪いと思ふことは總てを避けて思はざることだ。小生は御身の一日も早く快癒せんことを祈つてゐる、いや自分一人

ではない、御身のお母様も此方の母も子も、その心に更に變りない。御蔭で子供二人は此頃は頗る達者、御身の病むのもよそに毎日、機嫌よく遊び、和光は食べ放題に食べてゐるが、一寸も障らない。（畧）

最後の訣れとなつた十日前のその日にも、訣る、に臨み御身は寺に嫁いで來たのだから、もしものことがあつても、その際、人々に笑はる、やうでは、いかないが：と云つたら妻は「そりやもう：」と云つて、笑つてよく心得てゐとの旨を無言のうちに告げた。常に云ふ言葉ではあるが、この不用意に告げた言葉が、最後にならうとは、夢にも思はなかつた。

死の前日、里の母に人々は無常の世にあり乍らみな長綱とつて、いつもでも生き伸びるやうに思つてゐる人の氣が知れないと云つたとか。又、死の朝、聲高々床上にありて、念佛を稱えたと。いつもは聲を出すのはきつから心の内で稱へ喜びますと云つてゐたに、今朝はどういふものかと、里の母も思つたと後になつてこのことを話された。

三十三才を一期として、妻は逝いた。その夜、遺骸を棺に斂めた。静

かに瞑目する妻の手は胸間に組まれてゐた。その手には白房のついた念珠をソットかけた。これぞ、拾年前、彼と佛前で夫婦の契り結びし際、とり交せし結婚念珠で、白房の念珠は予の與へしものである。

二人の父の跡を慕ひ、妻は予より一足先へ寂靜無爲の都へ、この念珠を手にして、永劫、歸らざる旅立ちをするのか、此世での夫婦の契りは余りにも短かつた。恰で夢だ幻だ、と思ふと萬感胸にさし迫るを覺えた。

その夜、讀經の聲もしめやかに終り、人々は嗚咽のうちに柩は火葬場に送られ、荼毘に附した。翌朝、遺骨を拾ひ、午後、母や子供、近親の人々に守られ、遺骨は自動車にのせられ、いとも靜かに彼の生れた家を離れ出た。この白布に被はれた箱を携へ、歸らうとは思はなかつた。これが病が癒えて、健やかな体となつて、歸つて來るのだつたら、子供はどんなにお母さんと歸へるのだといつて、喜ぶのであらうにとまた歸らぬ愚痴を起こして、車上にありて、子供等の顔をみる。その翌朝、訃を門信徒に報じ、葬儀は十九日に本寺本堂に行はれ、親戚、故舊、門信徒等多數會し、いづ

れも其の死を悼んで下さらないものはなかつた。また遠方の知友門信徒か
らは、心から厚き弔詞を数々添うし、一々涙をとうして讀んだ。